■自然賛歌

# 千両、万両

妹尾治人

縁起の良い名前の付いた植物は沢山あるが、千両・万両もその代表的なもので、宝石のような赤い実が評価されて、その名が付けられたのだと思われる。

どちらも、常緑の小低木で鑑賞用に庭に植えられている。

年の暮れには縁起ものとして、千両・万両の鉢植えが園芸店の店先に並べられる。また、千両は赤い実が木の頂点にかたよって付くので、クリスマスり飾り付け用に、花屋さんでも販売されている。

ところで、千両・万両に対し、一両・十両・百両を先人が考え出しているから面白い。

但し名前は別名で、それぞれにふさわしい植物を見立てたものである。

百両は唐橘（カラタチバナ）で、園芸店ではこれを百万両と名付けて販売していることもある。山でもたまには見ることが出来る。

廿日市では佐方の谷筋に、僅か数本が残っている。

十両は藪柑子（ヤブコウジ）で、これは正月の松竹梅の寄せ植えを、盆栽に、福寿草と共に植えられる。凡そ植物は、樹木と草本とに分けられるが、ヤブコウジは樹木である。

因に草本で一番大きいものは竹ではないかと思う。竹は樹木図鑑に載せられていることもあるが、竹には年輪がなく、何年か後に一度花を付けると枯れるので、草とするのが正しいようだ。

一両は蟻通（アリドウシ）で、赤い実の上に必ず蟻が通る穴が二つある。（正確には、花柄の跡で穴ではない）

アリドウシはアカネ科で木のものと、草のものがあるが、十両より小さく、地面を這う蔓蟻通しが一両と呼ぶにふさわしい。

日当たりの良い山の道端でよく見られる。

これで一両から万両まで五つ勢揃いしたが、共通していることは、常緑で秋から冬にかけて6～7ミリの真っ赤な（まれに白いものがある）実が付くことだ。

いずれも緑の葉と、真っ赤な実は、よく目立つので、野鳥にもすぐ見つけられて食べられる。特に鵯鳥（ヒヨドリ）に見つかったら最後で、一粒も残さず食べられてしまう。

しかし、自然の仕組みはよく出来たもので食べられた実は、表面の果肉が消化されるだけで、種はそのまま糞と共に排出される。

赤い実を、そのまま蒔いたのではほとんど発芽しないのに反して、野鳥のお腹を通った種子はよく発芽する。野鳥の行動範囲に、こうして芽生えたものがよく見られる。

但し、千両だけは、廿日市市の野山では発見されていない。

発見されない理由は、野鳥が食べないのか、全部消化してしまうのか、よく観察してみたい。

最近、世の中景気が悪い。株価もまさかの一万両（一万円）を割り込む安値の日もある。

そこで、商人仲間では縁起をかつぎ、『千両と、万両と、蟻通し』を我が庭に植えて、語呂よく『我が家には、千両万両有り通し』と、洒落て商売繁盛を願っているとか。

ついでに『大判草・小判草』も植えて『大判・小判ざくざく』と行きたいものだ。

＊わが庭に鳥が万両運び込む

【自然観察指導員】

千　両

万　両